

三陸の近景

10

「忘れないでほしい」の意味

仮設住宅を一軒ずつ訪問する中で、最近、印象に残っている言葉があります。ある方の「忘れないでほしい」という言葉です。

その「忘れないでほしい」は、「苦しんでいる人を忘れず、支援の手を差し伸べ続けてほしい」ではなく「震災を忘れずに教訓を生かしてほしい」、つまり「日頃から災害に備えて、私たちと同じような思いをしないでほしい」という意味が込もっていました。

震災から1年程度は、前者の意味だったのが、最近は意味合いが後者に変化してきたそうです。

その変化の原因は2点あるそうです。1点は、外部からの支援に頼ってばかりではいけないという



声か、被災された方の中から上がってきたこと。緊急支援を必要とする時期は過ぎ、住宅再建や仕事復帰など自立への歩みがゆっくりと進んでいる状況です。街は、瓦礫が撤去され、新しく山を切り開き造成が進むなど刻々と変化しています。多くの方が、いつまでも来援ボランティアに頼ることは自立の妨げになってしまうという危

機感を持っておられます。

もう1点は、日本の各所で自然災害が起こっているという事実。集中豪雨による水害、豪雪、竜巻が相次いで起きました。南海トラフの危険性が叫ばれています。東北沿岸部の方々は「3月11日まで自分の身にこのようなことが起こるとは想像もつかなかった」「津波の危険を後世に伝え、自然災害への備えを怠ってはいけないことを語り継ぐのが津波被災者の使命だ」とおっしゃいます。そして、申し訳なさそうに「警鐘を促しても、備えない人たちが、がいる。非常に残念」とこぼされました。

災害を自分の身に起こることとは思わないのが私たちのありようかもしれません。しかし、そのことに気付けばこそ、いま私たちのできることが明確になるのではないのでしょうか。「忘れないこと」に多くを教わりました。(本願寺派総合研究所研究員・金澤豊)